

優秀賞

憧れを力に変えて

岩手県盛岡市立渋民中学校

2年 富山 このか

私は今、群読劇に夢中になっている。群読劇に取り組むとき、私は素の自分を出せて、自分をよく見せられて、一番輝ける場だと思っている。

群読劇とは何か。多くの人にとって聞き慣れない言葉だろう。

それは私が通う中学校の伝統の文化活動である。有名な歌人の歌や詩、歴史を題材としたオリジナルのセリフを、キャストと呼ばれる出演者が声をそろえて朗読する。これが群読。これに加えて、キャストが一人で、あるいは数人で、時には全員で、歌も歌う。剣舞や舞踏もする。そうして、一つの物語を演じて創っていく。

スタッフと呼ばれる裏方の活躍も自慢である。キャストにスポットをあてたり、全体の背景を作ったりして盛り上げる照明スタッフ。動きに合わせて音楽や効果音を流す音響。作品の世界観を決めるキャストの衣装を布から制作している衣装スタッフ。そうしたものも、全て生徒が担当するのだ。普段の練習は体育館で行うが、本番は地域にあるホールで、本物の照明器具や音響器具を使うので本格的なものとなる。

私の通う中学校は、決して大きな学校ではない。だが、多くの生徒が、この群読劇に参加している。みんな5時までは自分の部活動がある。私は、バスケットボール部に所属している。その練習が終わってから集まっての練習だからきついこともある。去年も今年も暑い日々が続き、体育館はまるで蒸し風呂のようだった。群読劇の活動は希望者を募って行っているのだから強制ではない。なぜ、参加するのか。なぜつらい練習を乗り越えられるのか。私のエネルギー、それは「憧れ」だろう。

小学生で初めて群読劇を見たときの感激。演目は岩手の英雄「アテルイ」だった。

冒頭、暗い舞台に鳴り響く篠笛の音。勇壮な和太鼓の演奏に合わせ、次々に登場し、剣舞を繰り広げる主役級のキャストたち。スポットがタイミングよく、そのキャストを浮かび上がらせる。「かっこいい」と心の底から思った。かつて蝦夷と呼ばれた人々の平和への願いをキャストたちが群読するのも、アテルイとライバルである坂上田村麻呂の友情も、歌も、全てがすばらしかった。「あの舞台に絶対立ちたい」と強く思った。

中学に入って、待ちに待った1年生の参加募集がなされたとき、申し込むこ

とに何のためらいもなかった。

あの日描いた「憧れ」は、自分も主役になりたいという夢となっていた。

だが、練習は想像していたよりも大変だった。入ったばかりの頃は、大きな声を出すのも、体を動かすのも、恥ずかしい気持ちがあっ、思ったようにできなかった。指導してくださる先生に何度もダメ出しをされて落ち込む日もあった。

でもあきらめはしなかった。強い気持ちが、「憧れ」が私を突き動かす。先輩方の姿をよく見て、練習を繰り返していく。すると、しだいに恥ずかしさがなくなり、生き生きと演技をすることができた。

この上手にできたときの達成感は、次へのやる気につながり、私は群読劇の練習がない日も、自分で練習するようになった。しだいに、毎日の練習が楽しくなった。

また、私は、日々の練習だけを頑張っているのではない。練習前と後の小道具やピアノの片づけも毎日行っている。私は、この片づけの時間はすごく大切だと思う。小道具を作ってくれている先生やスタッフの方たちへの感謝の気持ちがあるからだ。

そして、練習をしていくうちにやりたい役も決まってきた。それは主人公である。私は1年生ながら積極的にオーディションを受けた。私の努力もあり、重要な場面に1年生ながら選んでもらえた。

2年生になった今、何度も練習し、オーディションもたくさん受けた。今では多くの場面に出演することができている。そうした場面を全力で取り組みながら、朗読や群読、歌唱、踊り、いろいろなものに挑戦し、力を蓄えている。必ず目標の役を射止めて、歴代の先輩たちに恥じない演技をしてみせる。積み重ねた日々、気がつけば私は群読劇が大好きになり、夢中になっている。

群読劇に夢中になって得たものはたくさんある。毎日の生活の場でも、それは試され、鍛えられているからだ。学ぶこと、返事やあいさつ、人との交流や協力、夢を描いて向かっていく力……。数え上げればきりが無い。

あの日の「憧れ」は、未来への希望、エネルギーである。

私は立ち向かう。たとえどんなに難しくとも、自分を信じ、諦めず、自分を信じ続け、「憧れ」を力に変えて。